

桃木暁子 2008年1月23日

「学問と社会のあり方」研究会 第9回研究会（2008年2月7日、地球研）

「地球研に今、もとめられること—「社会のなかの地球研」をキーワードに、21世紀型の組織活動に転換を」

話題提供要旨：

21世紀初めという時代にあって、国内的にも国際的にも、科学（学問）研究機関／研究者が研究の成果を広く社会に伝えることの必要性が強調されている。研究の学問的価値を高めることに努力するだけでは、研究機関の活動としてもはや十分とはみなされないのである。地球研のように、地球環境問題というすべての人々に関係する問題を扱う研究機関であれば、なおさらである。「地球研はアカデミーとしての自己設計を！」（http://www.chikyu.ac.jp/rihn/newsletter/newsletter_11.pdf）も、「社会のなかの地球研」という視野をもって考えていく必要があるのではないか。そのような立ち位置に立つかどうか、おそらく地球研の将来性をきめることになる。最近、企業では、CSR(Corporate Social Responsibility =企業の社会的責任)という概念が導入されている。「持続可能な社会をめざすためには、企業も経済（金儲け）だけでなく社会や環境の要素にも責任をもつべき」という考えである。民間企業よりも公益性が高いはずの国立機関法人は、このような意識を当然もつべきである。「経済」を「研究界での業績」と置き換えれば、CSRの考え方はそのまま研究機関にもあてはまる。持続可能性とは相反する要素（研究職員の任期制、年限のある研究プロジェクト制、等）に支配された構造の地球研で、これを実現することが可能だろうか。なにか根本的な発想の転換が必要であろう。

参考資料：

CSRについて

<http://www.csrjapan.jp/>

<http://ja.wikipedia.org/wiki/CSR>

「第3期科学技術基本計画」第4章「社会・国民に支持される科学技術」

http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/kihon/06032816/001/001/013.htm

「総合地球環境学研究所（仮称）の構想について（最終報告）」

<http://www.chikyu.ac.jp/rihn/shiryo/kousou/index.html>